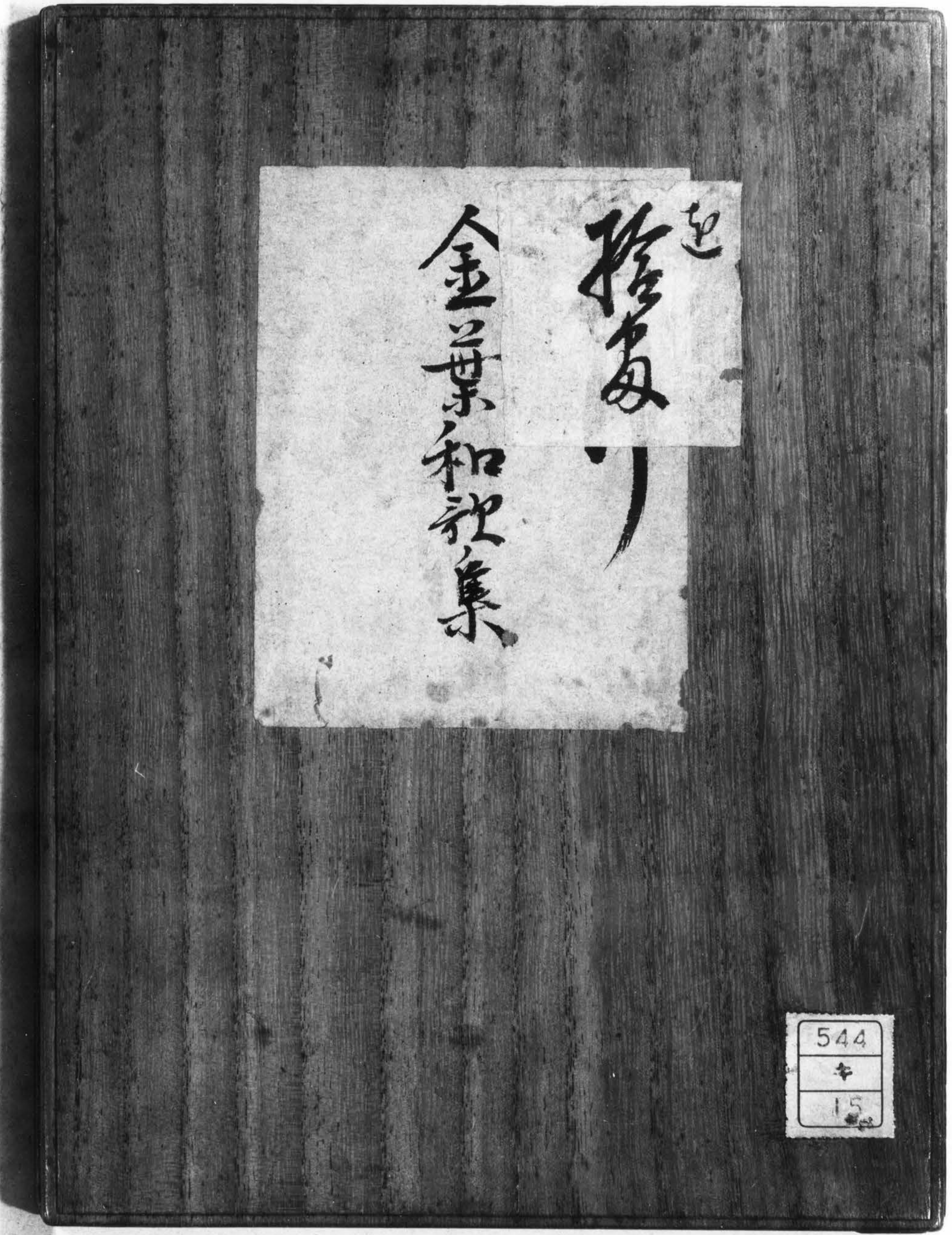

金葉和歌集
544
15

544
キ
15

飛鳥井殿雅春卿金葉集

544
キ
15

九州大學圖書館
昭和 24. 3. 19
182156

金葉和歌集巻第一

春

堀河院御時百首の哥たてまつりけるに
立春の心をよみ侍りける
修理大夫顕季

うちなひき春はきにけり山河の岩まの氷けふやとくらん

元日の心をよめる
春宮大夫公実

春たちて梢にきえぬ白雪はまたきにさける花かとそみる

藤原顕仲朝臣

いつしかと明ゆく空のかすめるは天の戸よりや春はたつらん

皇后宮肥後

ほらやまはるゝ谷川のうすけ氷とくやけふは立らん

百首の哥の中に小松をよみ侍りける
よめる
斎宮院内侍

春のくる夜のまの風のいかなれはけさふくにしも氷とくらん

早春の心をよめる
大宰大弐長実

伊勢の海に春風きつゝよる物は潮のみならす霞なりけり

む月のはしめつかたに雪のふり侍りけるに

はつはるの　修理大夫顕季

あら玉の年のはしめにたちそめしかすみに春のしるしをそ見し

春宮大夫公實

朝日さす峯のしら雪むら消えて春のかすみはたなひきにけり

家の歌合に霞の心をよめる

少将公教母

あさみとりたなひく空の霞かなやよひの山にはるはきにけり

藤原顕輔朝臣

年くれてはるはきぬらし霞たつ田の山の峯に消え残るらむ

霞かゝれるをよめる

大宰大弐長実

梓弓はるたちぬれは伊勢の海のあまのしほやき山もかすみたなひく

百首の歌の中に鶯の心をよめる

修理大夫顕季

鶯のなくにつけてや春の日の山もかすみのたちわたるらむ

はつ鶯をきくといへる心をよめる

春宮大夫公實

ゆく梅の花のにほひに鶯の里なれそむる声そきこゆる

ひ月のうちに春をむかへてよめる

藤原顕輔朝臣

冬やきの雪ふかけく鶯の初へ出かるゝ声かきらん

暁かけし鶯をきくといふ心をよめる

源雅兼朝臣

鶯の来なく梅のにほひにさそはれて花をもたれか

皇后宮にて人々哥よみはべりけるに

雨の中の鶯といふ心をよめる

源俊頼朝臣

春雨はしきてふらねど鶯の声はしほれぬものにぞありける

良暹法師まかりてもおく見えければ

大弐法師の家なりし梅の花に

来りければ門より帰りて見ければ

てつかはさるゝ入侍りける

良暹法師

梅花よりかすかなるゝてこそいくたびも見め

梅も散りぬればいふ色かしはよめる

前大弐長房

いろかにていかやけんもかれの神さへ色もかはらぬ

朱雀院にして人々まかりて閑庭梅花と

いふ心をよめる　大納言経信

春の夜はやみもこゝをは梅の花香やまた風にきこえぬ

道雅三位の家にて哥合し侍りけるに梅花をよめる

藤原兼房朝臣

春はなほ我身にしみて梅か香のこゝろにかゝる花のさかりを

梅花をよめる　源兼正

限ありてちりはてぬとも梅花柳の色にのこれとそ思ふ

子日のこゝろをよめる

大中臣長朝臣

かすかのゝ子日の松をひかてこそ神さひゆかむかけにかくれめ

百首の歌の中に子日のこゝろをよめる

大蔵卿匡房

きみか庭の池の汀の姫小松ひく波のみそ我にとはなむ

柳糸随風といふことをよませ給ける

院御製

さほ吹く柳の糸のこゝろからみたれて乱るゝ春の山風

百首の哥の中に柳をよめる

春宮大夫公実

朝またき吹くる風にまかすれはかたよりしけり青柳の糸

池岸柳といふことをよめる

源雅兼朝臣

風ふけは波のあやおる池水に糸ひきそふる岸の青柳

帰雁をよめる

前斎院尾張

いかなれは山[illegible]花の[illegible]

霞の中の帰雁をよめる

藤原盛通朝臣

都へは[illegible]霞[illegible]

帰雁とよめる　藤原経通朝臣

いかにして越路[illegible]やとるらん

花薫風といふことをよませ給ける

摂政左大臣

吉野山みねの桜や咲ぬらん麓の里ににほふ春風

白河院花見の御幸に

新院御製

尋ねつる我をや春もまちつらん今そさかりににほひそめける

太政大臣

しら川の[illegible]花のさかりに[illegible]

人[illegible]てよめる

大宰大弐長実

吹風に花のあたり[illegible]

待賢門院兵衛

萬代をなかしとみゆる花の色をとらしとも白川の水

宇治太政大臣京極乃家の御幸に候て行ひあり　院御製

昔より浅色のハ三月三日なる花の色ひかりまさしく

を山さくら花のさかりは

春宮大夫公実

ちりもせてうら吹風に根をおろしてけふこそまさる桜盛りの

松間桜と伊勢の御しあり

内大臣

まとゐして松の緑に引かへて風にしられぬ花さかりかな

左兵衛督実能

よの中に常に色ある桜花松の千とせにたくへてしかな

花為春友と伊勢の御しあり

内大臣

ちるはなを春のとまりに成にけり

新院御時にて花契遐年と云事

とよめる

待賢門院中納言

白雲にまかふ桜の梢かな千とせの春を空にしるかな

藤原顕輔朝臣

萬代にみる千年の花の色をたれかはよそに思ひくらさん

の梢よすに花とふゝきて、あらしはる

なり　　　源貞亮朝臣

志ら雪所の梅桜よ見ゆるあちこちの山のかたへは

堀河院御時女房ともと花山の也

見まかりけるにてりてらゆりまかりて

御車よてあはれけるにかりける女房よ

かりくしまも紅葉には宗の

堀河院御製

よそにても思ふことに懸しらぬや花の桜や盛りなん

源師俊朝臣

ふしみ草のあはれもそこし桜花見ゆく御覧の山の花
山の花とかそみえまかしは

大弐長實

鏡山みつる人ことそしらぬは都よのまたちぬるまさき
見る山のまさしき思ひしと

摂政尼上

花はゆきさき桜を志ろしてさくら山路ふりあかしは
人くれゆく風吹十首ゆきも無世尽

あり小桜の名　　修理大夫顕季

ゆきて花咲かるけふや吉野山さらてのちつも無気のも

山花留人といへる心をよめる

大中臣公長朝臣

なのえハ木のもとにそやとりぬへきちりぬる桜惜しさハ

宇治前太政大臣家の歌合によめる

皇后宮摂津

あまはりの庭盛て雨の桜花をしまぬ人も散を世ハ

源俊頼朝臣

山桜咲そめしより久方の雲井にみゆる瀧の白糸

遠見山花といへる心をよめる

大蔵卿匡房

しら山雲升と見つる嶺をさしてあまそ行白雲立るらん

藤原忠隆

吉野山梢にしら雲とミゆるハ花の梢なりけり

堀河院御時女御殿女房たちあまた

ぐして花見ありきけるによめる

前斎院筑前乳母

昔にハあらぬ我身も桜ハ見しにかはらぬ風のにほひも

人ありけりてよな

僧正行尊

しらそへの桜に心の花見しるとハ見てもさそ見えけれ

後冷泉院御時皇后宮の哥合にさくらをよめる

堀河右大臣

春雨にぬれて尋ん山さくら雲のかへしの嵐もそ吹

月前見花といふ事をよめる

大蔵卿匡房

月影も雲ゐる花も雲は風の後にはちるをのみこそ

殿上の家ゐるさくらをはるの千十首人々よみ侍りけるに

大弐長実

春の日のひかりにあたる花の雪は風みてこそちりはしめけれ

水上落花といふ事をよめる

源雅兼朝臣

花はみなあらしやふかでちるらん桜のしたに音のみそする

落花満庭といふ事をよめる

左兵衛督実能

ちりつもる庭をきよめて花の風さそふにまかせこそ見れ

堀河院御時中宮の御方にて風聞花香といふ心を人々つかうまつりけるに

源俊頼朝臣

梅か枝に吹くる風にまかせてそ桜の花のにほひをもしる

落花のこゝろを　　長實卿母

春ことにあかぬ櫻の花故はしゐてちらすをうらみつる哉

落花随風と伊へることをよめる　　右兵衛督伊通

こゝやしいつくにかくさくらの花風の花をさそふまてちるなん

水上落花といふことをよめる　　大納言經信

みよしのに花やちるらん山河のゐくひにいとゝ浪のかゝるを

藤原成通

水のおもにあやなして花をとみつけそらにそ風のをりける

落花教客といへることをよめる　　藤原永實

ちりかゝる花の雪のつもりてそ花ある神の里にやとれる

堀河院御時もゝのうちにちるさくらをよめる

めくみはさこそうの物の盡て山さくらはせ
行て中宮のうへにつもりせぬさくらを
家の春にちりて散もみちを御らん給て
ほかにまつまる　　康遠との

櫻さく雲のかゝりて花そめてありしにもにぬ山をたちかくすらん
花の名をよしつるとこそよめる

郁芳門院安藝

庭の花もとの梢に吹かへせちらさとの名にこそ絡めき

思落色ぬ心にこそ侍るなる

隆源法師

夜ことにひとりはおほけなきこともしらぬにいはねはこそあれ

書物は思ふ事の通へる道にも聞けるたとへ

見てもしるへし　　高階[illegible]朝臣

櫻咲く山たかくけふ陰のかたのゝとくや花を見ん

後冷泉院御時月あかつきつかるる春

へりて南殿にまかりてかひなくのなり

ありし庭のむらちりてをり侍りけるものを

読人しらすつかはしてまつりたまひけるを

やとれるをみてありて中宮のおほせに

なりてはやはしてそのかはりのまうけ

にとりあへすとのみてありけれはさい

まこと世にあるまてをりてまゐらす

とそしてそいひとむせとのりまゐれく

はなかりける

下野

すきし秋の月のひかりもみえさりし雲井の花はいとはしき

新院小弓して殘花薫風といふ心を

よめる　中納言雅定

ちりそむる花のちり代にしづめるはしらるゝ
ふしてくゝ百首よみ侍りけるに早蕨
をよめる　権僧正永縁

山里ハ野への早蕨もえいづるおりにのみこそ人はとひけれ

百首の哥の中によみ侍りける　修理大夫顕季

東路のかたのをかの沢のなはしろにまくとこそさてさく種

春の田代よめる　大納言経信

荒小田のはせ苔門まりて乱れてしめ縄よりはへて
苗代をよめる　津守国基

畔のかたの野沢の小田をかへしても種まきそめてしめはへてけり
後冷泉院御時三条殿の女御の哥
合に苗代のこゝろをよめる
藤原[illegible]家

山河のそゝきの苗の苗代によるべき水をせきつくるかな
家の蛙をきゝてあまくもの
あれしひとのたのそはわたくをこそしよめる
中納言雅定

我宿よ又こゝろしくてかくれはわたりぬる庭にこそ嵐の色

水邊歎冬　　摂政左大臣

限ありて春なくにはきし山吹をいくはるかけて花のさかりを

大貳長實

きしかけの川よ影みえてうつろふは山吹の色

後冷泉院御時哥合に山吹の心よめる

前大宰大貳長房

やまふきの影の風にへたゝぬとちるさきにけん

暁見躑躅といふ心をよめる

摂政家參河

入日さすゆふへの井のきしにて山下て[illegible]

院小面にて橋上藤花といふ心を

大夫典侍

色ふかき松にかゝりて東路のまのゝ橋に藤を

藤のかゝるとよめる

藤原顕輔朝臣

むらさきの色のゆかりに藤浪のかゝれる松もむつましきかな

房中藤の花の心をよめる

律師儒覚

今はとてちよ我宿の藤浪を鶴と[illegible]て[illegible]

岸藤花松といふ心をよみ侍ける
良暹法師
松風の音をもらせぬ藤なみをいかなる花と思ひけるかな
二條関白家にて池邊藤花といふ心を
よみ侍りける
大納言経信
池水の松のこえまてたちのほる波かゝりくる藤なみの色
百首歌の中に藤花をよめる
修理大夫顕季
住吉の松よりかゝる藤なみも世のまつりことにいかなるらん
雨中藤花といふ心をよめる
神祇伯顕仲
ゆくはるのわりなくなくに藤なみのまつにかゝれる色をそ見て
隣家藤花といふ心をよめる
内大臣家越後
あかなくの我とやいはん藤なみをわか物かほに見るそかなしき
三月盡の心をよめる
大僧都證観
春のゆく道にきてしも郭公なかなむやとそ思ふ
中納言雅定
ゆく春のつかさはいかにしてとまらぬものとしりそめにけん

三月盡ありける意といふことを試みる

春は都人々ことにひとたのしみて思ふ故今の暮に

桜咲たえ良家してくくいく三月盡の心

とし申せ侍りけるに

源俊秋朝臣

惜ても卯月へはしきこそて去りしも我袖にとめて

ちぎり梅く小く侍りける時三月はてにける

日くへのもしるくとつきぬまては

りしける

藤原顕輔朝臣

思ふやまとこふくりあらふ青葉とかれて花よりさきつる

かきもと

金葉和歌集巻第二

夏

四月一日更衣の心をよめる　源師賢朝臣

我のみそいそきたゝれぬ夏衣ひとへに春をおしむ身なれは

二條関白家にて人々残花の心をよませ侍りけるに　藤原もりふさ

夏山の青葉ましりの遅桜はつはなよりもめつらしきかな

應徳元年四月三日内裏にて庭樹結葉といふ心をよませ給ひける　院御製

[illegible]惜みしよりも成ぬれは松の[illegible]

大納言経信

[illegible]

卯花の心をよめる　春宮大夫公實

雪[illegible]卯花[illegible]

卯花連墻といふ心をよめる　大蔵卿匡房

歌よみ侍りける人〻にてそのころ鳳輦にて行幸ありける

ほとゝきすをまつ森の日は暮ぬとて言

とゝろかくなく〳〵まて

橘成元

ほとゝきす声羽中山の梢まて聞けるとこそ

左京大夫の家の哥合に歌よまる

左京大夫経忠

ほとゝきすなくと宿を時鳥思ふらむ

歌よみ侍りけるとき

内大臣

立よりて梅の花さやかにし歌よみ侍りける時郭公

歌よめる

藤原顕輔朝臣

かゝる身とてつれなきにあくかる郭公山の里

承暦二年内裏の哥合によみて

よめる

藤原孝善

何るあそこはある都へからしての山をこえてなくなけれ

郭公の心をよめる

権僧正永縁

きくたひにめつらしけれは郭公いつも初音の心ちこそすれ

源俊頼朝臣

鈴の掛くちの掛まりせで吹る非ともし山家のひゞきにし

新玉騒る号人と伊勢のうしろとよめる

中納言實行

あらたまに今ありせて吹る文の字すゑ

新玉と称とこうらし紙に海世紀へる

院御製

旧ふしる浪枕よりさてあふに波の花や今の道

後京極家歌合によめる

二條関白家歌

まりくの宿もくちて吹るとらの山を鳴とは

中納言女王

なにゞに浪たのしく秋とうつさとやまとつくれて暖の元

新玉とよめる　前斎院六條

舞とばく志りとゝろへ時雨ぬれる紋の梢の志すゑ

中納言雅定

わとるこ浪帰しうく家に山のこ風すかくれもの

宗治おほ政太臣家歌合によめる

康資王母

山ちく滝ゞく舟とく吹るはきるとそと風の音の道

海さなきの嵐作ちも成ゆりひぎもみち

なく郭公のこゑをきゝてよめる
中原高実
ありとのつと清くなりて郭公すきゆくかたの空ぞ恋しき
月落郭公といふことをよめる
皇后宮式部
ほとゝきす夜深き雲の絶まにかゝる月の影に鳴渡る哉
暁聞時鳥といふことをよめる
源行宗
ほとゝきす夜山の郭公雲ゐはるかに鳴渡る也
尋郭公といふことをよめる

時鳥こゑのあやめのなかにきく人ぞ郭公なく
雨中郭公といふことをよめる
大納言経信
わくらはに深雲路にすきゆく郭公やみにこゑをや宵闇
五月やみさ猶まさりけり今もそゝ鳴らす
内大臣
ゆく
あやめ草ひきてたもとにかけつれば千代の根をかけ
永承四年殿上根合に菖蒲をよめる
大納言経信
萬代よかつみの花を五月雨のふる池にゆくあやめ草かな

郁芳門院根合にあやめの歌よめる

藤原孝善

あやめ草ひくてもたゆくなかきねのいかて浅香の沼におひけん

承暦二年内裏の歌合にあやめをよめる

春宮大夫公実

そこ[illegible]や[illegible]への菖蒲をひく人も[illegible]
[illegible]そへし[illegible]しとる[illegible]五月の
[illegible]とも[illegible]代[illegible]にそ

権僧正永縁

あや女草我身のうきを引つゝみて[illegible]君[illegible]

百首の歌の中にあやめの歌よめる

春宮大夫公実

菖蒲草さしし軒端の[illegible]にほひも[illegible]
五月なりけり家にあやめをとそら
なる

左近衛権中将[illegible]

なか[illegible]へてなけあやめ草[illegible]
昔その院[illegible]行[illegible]
[illegible]菖蒲と人の[illegible]院[illegible]
[illegible]とし[illegible]

三宮

あさ霞やかて右京卿のよやうなりしまゝにふくらし

五月雨といふ事を　参議師頼

さみたれは沼の岩垣水こえてさらにかくれぬかたもしられす

五月雨のこゝろをよめる

前[illegible]さみち

五月雨の日数へにけれは東屋のかやか軒はもくちはてにけり

長暦二年内裏歌合によめる

源道時朝臣

さみたれは絶えぬの水やまさるらん菖蒲の下葉かくれゆくなり

俊忠卿家歌合に五月雨の心をよめる

藤原為仲朝臣

五月雨はみかさまさりて浦の橋かくれはてなはわたりかねつゝ

五月雨の心をよめる

左兵衛督実能

さみたれは田子の裳すそもくちぬらん水のみまさりて

三宮

五月雨は入江の橋のかくれぬるうつすそのなにかはしら七すし

摂政左大臣家にて夏月をよめる

神祇伯顕仲

夏の夜の庭にふれる白雪は月の入るにそきえゆく成けり

俊忠の家の哥合に水鶏の心をよめる
藤原顕隆朝臣
里ことにたゝく水鶏の音すなり心のとまる宿やなからん
摂政左大臣家にて水鶏の心をよめる
源雅光
夜もすからはかなくたゝく水鶏かなさせる戸もなき柴の庵を
実行の家の哥合に夏風の心をよめる
修理大夫顕季
夏ころもすそ野の風を吹せて思ふ事なく鹿や鳴らん
水風晩涼といふ心をよめる
源俊頼朝臣
風ふけは蓮のうき葉に玉こえて涼しく成ぬ日晩の声
照射の心をよめる
源仲正
[illegible]火串に[illegible]鹿の[illegible]とてこそ[illegible]や[illegible]らん
神祇伯顕仲
[illegible]山下にほりして[illegible]
中納言俊忠
さ月やみ花橘に吹風はたか里まてかにほひ行らん
百首の哥の中に花橘の心をよめる

春宮大夫公實

宵よりはむらさめそゝきし一むら松風はいやまさりけり

二條関白家にて雨後夏草といへる

こゝろをよめる　　源俊頼朝臣

このさとも夕立しけり浅茅生に露のすからぬ草の葉もなし

實行卿家歌合に鵜川のこゝろをよめる

中納言雅定

大井川いく瀬鵜舟のすきぬらん ほのかに成ゆくかゝり火の影

夏月のこゝろをよめる

源親房

まちかねてさもあらはれし山の木の間よりいつるは明る夜風の月

三井寺經範歌合　短月

慶範遍寛坊

ま遠さゝと山の端月影のあけぬる程てまつ露かな

六月の末日比よ秋の節に成ける日の

あはれにてよめる　　摂政左大臣

みな月のてる日数にもにかよふにや風の秋風そふく

公實卿家にて對水待月といへる心を

よめる　　藤原基俊

夏の夜の月まつほとの手すさみに岩もる清水いくむすひしつ

秋隣一夜と伊ふ心をよめる

中納言顕隆

みそきする河の瀬風の涼しきはなつとこえて秋やきぬらん

金葉和歌集巻第三

秋

百首哥中に秋立心をよめる

春宮大夫公実

とことはにふく夕暮の風なれと秋立日こそ涼しかりけれ

野草帯露と伊ふ心をよめる

大宰大弐長実

風ふけはあたの萩の白露をふきみたりける秋のはつ風

後冷泉院御時后宮の哥合

七夕の心をよめる

土左内侍

百代とも契そめつる七夕の結ひの衣は乱れしも
七夕は思ふらんとしある

能円法師

七夕の逢ふ瀬のうちとけて渡る人をもつらしかは
七月七日ちきりの事くもそ待てる年なる

橘元任

袖ひちてしほるゝ涙と七夕のかはせの流てぬる袖
七月七日ありしかなり

前斎宮内侍

忘れてし契りや七夕の橋たえぬりのほかにかはるらん

三宮

あまの河別れし後の橋のうへに乱れつゝ糸の身にしても乱

中納言国信

七夕はあかぬ夜の名残を惜しむらんあまの河原に
七夕後朝の心をよめる

内大臣

恨みけむふるき時しも七夕の涙の糸のつきせぬ
皇后宮権大夫師時

それながら七夕の涙や花の色に露そをくらん

内大臣家越後

あさなあさな風にまかせのまよりてほしとふわ

草花告秋といへる心をよめる

源俊頼朝臣

さをしかのあさる原の女郎花も秋とちきれる妻やなからむ

源縁法師

吹風にをしむとも散るもみちはをとゝめはしはし旅なれは

かはきはあきそへてなしては河にかゝ海よ水まかせ人

秋のくれとよめる

大納言経信

とのにては旅は来にけり山里の風音ぞひとり秋をしるらむ

田家早秋といへる心をよめる

右兵衛督伊通

ことしよりさなへの風の音そよく宿のかとたのいなはそよめる

やまかはの旅といへる心をよめる

藤原顕輔

なさとはやまつうき宿せし門田の稲葉をしろたへの袖さへそめて

田家秋風といへる心をよめる

大納言経信

ゆふされは門田のいなはおとつれて蘆のまろやに秋風そふく

三ヶ月のこゝろをよめる

大江公資朝臣

山の端にあかて入ぬる夕月夜いつ有明にならむとすらん

枇杷左大臣の家にて夕月夜の心を

よませ侍りけるによめる

藤原忠通

風ふけは枝やすからぬこのまよりほのめく秋の夕月夜かな

月惜宵といへる心をよめる

法橋忠命

草枕この旅ねにそ思ひしる月よりほかの友なかりけり

閑見月といへる心をよめる

顕仲卿女

よもきふに草の露のとこあれて独やかかる秋の夜の月

数明月といへる心をよめる

前中納言伊房

偽に成ぬる月の影をこそ思へ

鳥羽殿にて翫月といへる心をよめる

春宮大夫公実

秋もなかはをとしに振捨てし秋の夜やかはる

寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて歌合

月と池のこゝろをよませ給ける

院御製

池水のこよひの月をうつしもて心のまゝにわかものとみる

大納言経信

てる月の岩間の水にやとらすは玉ゐるかすを[illegible]

民部卿忠教

いつくにもこよひの月をみる人の心やおなしそらにすむらん

後冷泉院御時皇后宮歌合に駒迎

藤原隆経朝臣

[illegible]

源仲正

東路を[illegible]月の[illegible]

八月十五夜のこゝろをよめる

源親房

[illegible]

閏九月ある年八月十五夜をよめる

春宮大夫公實

[illegible]

水上月をよめる

前斎宮六条

雲の波かゝらぬさ夜の月影を清滝川にうつしてぞ見る

九月十三夜閑見月といへることを

源俊頼朝臣

すむ人のかりやはいつとかねて[illegible]
月とてや思ふ心は[illegible]

皇后宮式部

人めもしらてさやかにてらす[illegible]月の入りぬる

源師頼

伊勢の[illegible]月やまつらん[illegible]
[illegible]

大納言経信

承暦二年内裏の哥合に月をよめる

春宮大夫公実

[illegible]山のはに[illegible]月[illegible]

宇治前太政大臣家にて七首哥合に月をよめる

皇后宮摂津

てる月の光はしも劔となりて秋の水こそあやうかりけれ

源俊頼朝臣

山のはに雲の衣をぬき捨てひとりも月のたちのほるかな

水上月　　摂政左大臣

あらそひのいさよふ志賀の江の水にてすめる月の影哉

宇治前太政大臣家歌合によめる

一宮紀伊

鏡山〇くもりなき月のうつるにぞ秋の影さへ…

秋霧のはれて月のあかく

みえける参議師頼

伊勢の海の那波のしほ風…月の影かな

旅月出書といふ心をよめる

藤原隆経朝臣

きのふ見し霧のまよりせてはなれてこそ人の月をみるかな

終明月と伊ふ心をよめる

源行宗朝臣

夜をこめてくもる風のはれて…月の影

八月十五夜人々よみ侍りけるによめる

平師季

三笠山光をさして出しよりかはらてめくる姨捨の月

宇治入道前太政大臣三十講の歌合
に月の心をよめる

しらかはし　前斎宮

宵々に月の光を漏さねば世の風心すこく隠るる
月とよめる　藤原忠隆

みしまえて深山に雲晴てそのまゝのこゝろ恨
天台の花林院歌合に月をよめる

権僧正永縁

いつも猶珠は光をみかゝんとさえ行山の人月
詠月歌　藤原顕輔朝臣

三笠山さしのぼる月の清ければ秋のこころぞやすらぬ
太皇太后宮歌合に月の心をよめる

大納言経信

春日山みねのみち月影さやかなれば水の鏡に
あきらけき人の御影にくもらねば九月十三夜くて
御よころみ　大貳長実

くもりなき鏡の山の月を見てあきらかなる心をぞしる
源俊頼朝臣

しら雲や月のかげとも晴れ行くたえ行に遊
藤原家経朝臣

今よりハ昔かたりの月影よりのこるあと人にこそ今る

月照古橋といへる心をよみ侍る

三宮

と絶てくちかはしぬそれとも月かけのわたせる

水上月とよめる

藤原實光朝臣

月影のやとせてもいかてや池の[illegible]

題しらす

太宰大貳長實

行ぬにかけてそうけたみなれし[illegible]月

永萬元年歌合に月のこゝろを

なる

藤原家經朝臣

しらくもに[illegible]雲の[illegible]

修理大夫顕季

松稀て夜の[illegible]月をてみるらん

[illegible]月とよめる

藤原有教母

[illegible]月や昔の[illegible]

行路暁月といへる心をよめる

権僧正永縁

[illegible]月[illegible]

対山待月といふ事をよませ給ひける
土御門院右大臣
あしひきの月まつ程のひさしさに山のはしらて夜そ更ぬる
山家暁月をよめる
中納言顕隆
山里の田のもの稲葉かせそよきて志つくに月をとふらは
月のかくるはあはれにはらはせ月も
のゆりそそりなさとの人そ月は
へうまくそ待てよと聞ゆる
平忠盛
有明の月も有明の風にそよきてやまともみえつ
月のかくるゝ落葉とそいふらん
源俊頼朝臣
おもふとや春もみ神さためん月すみまて葉の月のやまに
虫をよめる
前斎院六条
露しけき花野のまくらに秋の夜の月の夜に鳴也
こたふかり小笹の葉もしかとよめる
顕仲卿女
河水の思ひのなしわすれ草しけるさかりの都まて也
題しらす
よみ人しらす

此歌は前て書入られたる今の乃のかはさし除

春宮大夫公実

いとゝ山家の嵐やさむからん夜な〳〵鹿の声きくなる

鹿とよめる　三宮大進

妻こふてそ鳴なる鹿の様にや立も山の秋の

暁聞鹿といふ事をよめる

皇后宮右衛門佐

よもすから月影をまちつゝ鹿の声

秋聞鹿といふ事をよめる

内大臣越後

秋くれは鳴つゝてあくかるゝ我身は志か妻の様

摂政左大臣の家にて旅宿の志かといふ

事をよめる

藤原顕長朝臣

世中とおもひてやさしかのとはあらて山に鳴らん

野花帯露といふ事をよめる

皇后宮肥後

志ら露と人はいへとものへみれはおく花ことに色そかはれる

太皇大宮歌合し人毎のよりて萩の

ことよめる

僧正行尊

小萩つらにほふ盛りは白露もいろ〳〵にこそみえ渡りけれ

萩のうたとてよめる
大宰大弐長実
しらけつゆの萩か露をとりけつ袖に今とそみる
女郎花をよめる　隆源法師
をとこ毎にけつ野へまてやとりつる花の名にたにまとはれん
顕季家哥合りとよめる（?）とよめる
中納言俊忠
夕露の玉かしてや女郎花野へのの風にまかへん
女郎花をよめる　藤原顕輔朝臣
しらすやをくらし女郎花なかくかくへむ[illegible]

摂政左大臣
をとこへし秋のの風にうちなひき心ひとつをたれによすらん
摂政左大臣家にくらんとよめる
源忠季
さをしかの汀に行萩か海浪のうへにてやあはれとはみん
らんとよめる
右兵衛督伊通
かりにこてきしもや萩か秋のはにきりのおきし
神祇伯顕仲
いかにうしの家の垣ねやあはれ[illegible]萩かはな
鳥羽殿前栽合に女郎花をよめる

春宮大夫公實

あだし野の露吹みだる秋風になびきもあへぬ女郎花かな

野草留人といふ事をよめる

平忠盛

ゆく人をまねく野への蘭こひて家に植ゑてをはや

堀河院御時百首として名題をさくりて
歌よませ給ひける時蘭をとりてよみける

源俊頼朝臣

をくさの今は濃せにみちてあるかな秋の露

河霧をよめる

藤原基光

宇治川の川せもみえぬ夕霧にまきの島人舟よばふなり

郁芳門院根合に菊をよめる

中納言通俊

盛りなる籬の菊をけさみればまだ空さえぬ雪ぞつもれる

鳥羽殿の前栽合にきくをよめる

修理大夫顕季

ちよまでも君がつむべき菊なれば露もあだにはおかじとぞ思ふ

摂政左大臣家にて紅葉隔墻といへる心を
よめる

藤原仲實朝臣

となりのたかきの立枝の紅葉をよそにこそみれ

承暦二年内裏哥合に紅葉をよめる
源師賢朝臣
さゝ嵐の杉やいはくら川みそのこのみの紅葉なるらん
宇治の秋の大井川にながれざりけり
り水色紅葉にはいろ〳〵よめる
大納言経信
大井川いはなみたかしいかだしよきしのもみぢにあからめなせそ
太皇太后宮扇合に人々まいりて紅葉せん
ことよめる
源俊頼朝臣
音羽山もみぢちるらしあふさかの関のをかはに錦おりかく
落葉をよめる　藤原伊家
苔川にちりしけるを立田姫このつりみちよ嵐そ
大井川の古年よりはこぼれまさる
修理大夫顕季
大井河かはをちの声なりせぬ紅葉をそはちしやとどん
深山紅葉といふ心をよめる
大納言経信
宵しとおもて声たくいくも蔵の紅葉はふりそふる
紅葉をよめる　神祇伯顕仲
しほれしみのかせりやまなくらと梢の上は嵐ぞふく

大井河逍遥ノ水上紅葉といふこと
をよめる　藤原伊家
さらに知る照るとなつかしき木の葉も紅葉の上にはなれは
落葉埋橋といへる心をよめる
修理大夫顕季
小倉山みねの嵐の吹からに谷の梯もみちしにけり
落葉満水といへる心をよめる
大中臣長朝
大井川はやきみなせに散しきて筏も錦にみえわたるらむ
落葉随風といへる心をよめる
大宰大弐長実母
たつた山ちりしもみちを嵐の吹まかせつつそみる
九月尽夜よめる　中原経則
あとしらや嵐の山の秋の音の西にかよふ秋なりとも
源俊頼朝臣
草の原かれにし虫の露をさへかたみとそしむ秋のわかれん
九月尽日大井川にまかりてよめる
春宮大夫公実
たかせてや雲の名残をおしむそ秋の限なる

金葉和歌集巻第四

冬

承暦二年御門にて殿上のをのこともを
題をとりて哥よませ給けるに時雨をよみて侍
りける　　　　源師賢朝臣
神な月しくるゝまゝに小倉山したてるはかり紅葉しにけり
神祇伯在原親子家歌合に時雨を
よめる　　　修理大夫顕季
志くれゆくあ女山のみちのくをとはふ人ふかく
奈良にて人々百首哥よみけるに落葉
をよめる　　　　権僧正永縁
山川の水はなかるゝ紅葉の名そをしまれり
しくれをよめる　　橘政家参河
神な月時雨の雨のふるからにしもおけるすゝき
堀河院御時殿上紅葉といふことを
よめる　　　お中納言資仲
とみち山は秋霧ふかけれは三田の川の霧そたち
大井川よるもそ紅葉をよめる
平経親
大井河みちとわたる紙はらすかと錦かけて見ゆ

落葉をよめる　大納言経信

みむろ山紅葉ちるらし旅人の菅の小笠に錦おりかく

竹風似雨といふ心をよめる
中納言国信

まよ竹の末葉を袖とうきてつゝ雨と思ふに風ときこゆる

十月十日ころ人の庭の花多くを見て
よめる
法印光清

ますふよに嫁えてすゝ神の世なりて妻とふ人

百首の哥の中にもみぢをよめる
源俊頼朝臣

龍田川しからみかけて秋すきのみむろの山の紅葉ちるころ
あらしとよめる
皇后宮肥後

ねやかゝる河せにうかふ網代木は立しつめてそかゝる人
月のみ待てや渡るといふ心をよめる
大納言経信

月清みせゝの網代によるひをは玉もにさゆる氷なりけり

旅宿冬月といふ心を
よめる

あひ(?)ほしてかへる旅人のまくらにもしのぶ(?)かたみの月のかげかな

関路千鳥といふ心をよめる

源兼昌

淡路しまかよふ千鳥の鳴声に幾夜ねさめぬすまの関守

氷をよめる　藤原隆経朝臣

夜をさむみ舟の音そしつまりける汀の草に氷ゐるらし
音水治めとゝ色つしけり

内大臣

谷川のしらいとひも氷そとけて流れぬ

百首の中に氷をよめる　藤原仲実朝臣

さよふけて風やさゆらむ池の氷ぬらむ

冬月をよめる　神祇伯顕仲

冬しもる宇治の川瀬の月影は宿しけれとも氷とそ成る

氷満池といふ事をよめる　大納言経信

水鳥のつららの枕ひまもなしむへさえけらしとふのすかこも

深山のあられをよめる　大蔵卿匡房

篠の葉にしけきみ多やまかせのふくにつけてや深山に霰ふるなり

氷逼寒草といふことをよめる　大中臣公長朝臣

高嶺には雪深ならし志賀の山こえはけふ草枕八重雪
宇治前太政大臣家三十講合に雪歌
とよめり　源俊頼朝臣
衣手にしく雨風冴えてこそ山には雪降りぬらめ
楊と初雪といへるにや　前斎院とあり
志賀浦の波のさゝ波かけて風にかた糸結ふる白雪
初雪とよめり　大納言経信
を雪の積の葉に深くなりにけりやとの山風寒さ
雪中鷹狩とよめり

源道済
ぬれてかりゆくなのうへの雪払ふらん
鷹狩のうたとよめり
源俊頼朝臣
をちかたの浦(?)には我身にしらけ雪降りにけり
百首の中に雪の色とよめり
大蔵卿匡房
いつしかと末の松山波こえてねぬる雪消えて
宇治前太政大臣家歌合に雪歌
とよめり　皇后宮摂津

よる雪に杉の葉しろくふれるをみてよめる

中納言女王

いそのかみふるの山への杉の葉も雪ふりぬれは花そさきける

大嘗会主基方備中國弥高山をよめる

藤原[illegible]成

雪ふれはいやたか山の梢にはまた冬なから花そさきける

雪の歌とてよめる

源俊頼朝臣

宵にはきのふに春とみしよしの山あたり雪ふれは
ゆきさの御河葦にふりそゝいて侍らん

志らかはにまかりける夜雪のふりて侍れ
つとめてよめる

六条右大臣

朝氷みつの新たにまされとも雪にとのゝしるしなりけり

炭竈をよめる

皇后宮権大夫師時

すみかまに立煙さへ小野山は雪けの雲とみゆる成り

百首の歌の中に雪をよめる

澄源法師

都に雪ふりぬれは志からきの槙のそま山跡たえぬらん

皇后宮肥後

道もなくつもれる雪に跡たえてふるさといかにさひしかるらん

選子内親王いつきにおはしましける時
雪のふりて侍りける夜月のあかきに
わらはへ(?)ゆきとかくしもてあそび侍りけるよ
や月見えけれは殿上の人々まかりて
しらせ侍りける　藤原兼房朝臣
かきくらし雨ふる夜半のすめる月と雪とふかくおもほゆ
家経朝臣のもとにて[illegible]の心を
[illegible]をよめる　康資王母
霙やはふりし袖の返しせはひるのつらむ[illegible]
[illegible]をよめる　皇后宮権大夫師時
氷ゐつゝしろの山に雪ふれは[illegible]けぬ[illegible]とそみる
氷をよませ給ける
三宮
ほそ谷河へやらにせ寄ひしらふ[illegible]限は
氷をよめる　花山院六条
すみのにふしくへてやあれけん
池氷をよめる　前斎宮内侍
[illegible]とゝたてしらん[illegible]池のつゝある
修理大夫顕季
こほりゐるそやまとの[illegible]の[illegible]

依花待春といふ心をよめる

内大臣

千とせすくまつのことはにこそ花のゆかりにはるを待らん
菓葉乃色をよめる

藤原成通朝臣

今年こそ春もしらしとおもひしにはるにはなるとさくらなりけり
枇杷左大臣家にて冬の題をとりて
てよみ侍りけり小蔵人とよりてよめる

藤原永實

かきくらしあとかくる紅葉にあまるはをみてけふ年の暮

この哥よみてその年つかさめしにかへりて
蔵人の名残をおもひいでゝよめる

三宮

いかにせんさくらしらしとたちかへてのこりすくなき花をまつかな

中原長國

まちわびてはるかにそ花のさかりの秋のこそはゆかりなき

中納言國信

千とせまでをしみかへて花の色もかはらぬ色のうへにそ見る

金葉和歌集巻第五

賀

長治二年三月五日内裏にて竹不改色
といふことをよませ給ひける
堀河院御製
千世ふれとおもかはりせぬ河竹はなかれての世のためしなりけり
郁芳門院根合にいはひの心をよめる
六条右大臣
萬代とまつせたる色しるきみか春そみなれと見まして
堀河院御時中宮遷御堀河院時松契
遐年といふことを
大納言經實
水のおもに松のしたえのひちぬれはちよはなみのかすにそありける
松樹中桃花といふことをよめる
源師俊朝臣
萬代とまてもさける桜花ちらしはなれすあかすぞみむ
橘俊綱朝臣家哥合にいはひの心を
藤原國行
とのもりのつかさはいつも萬代のはしをのほりてあそふなりけり
百首の歌の中に祝の心をよめる

源俊頼朝臣

君か代は松の上葉におく露のつもりて四方の海となるまて

祝の心をよめる　大納言経信

君か代の程をもしらて祝ふとも尽せぬことをしれはなりけり

後一条院の御時弘徽殿女御歌合に祝

のこゝろを　永成法師

君か代は末のまつ山はるはるとこす白波のかすもしられし

嘉承二年鳥羽殿行幸ありて池上花

といふことをよませ給ひける

堀河院御製

池水の底にほふ花桜みるとてあかし千世の春まて

大嘗会主基方辰日参音声敷山

といふ所を　藤原行盛

うこきなきほこの山風おさまりてうこきなき代そなりける

悠紀方朝日郷をよめる

藤原敦光朝臣

くもりなきとよのあかりにてらすかな朝日の里の光さしそふ

三日楽破り雁琴をよめる

松風もことの葉にかよひてそ引まねく世の初めなる

後冷泉院御時大嘗会主基方備中

二万里とよめる　　　　藤原家経朝臣

九重にはなほしきこえし二万里の数そひて君が千代まさるらん
おなじ国の万井とはいふなりて

　　　高階明頼

苗代の水には井手もうつりけり氏もときはの君が千代には

祝をよめる　　　　皇后宮肥後

いはひつる言の葉の数にあまたの君が千代をかぞへむ

花栄又逃年　少しは一重の春をもしらるる

　　　　　大宰大弐長実

もろこしも天の下にぞあるときく照る日の本の光ならねど

摂政左大臣中将にて侍りける時法華八講
はじめて下侍りけるに周防内侍女房にて下
侍りけるに、ふたたびの年の新年にて侍りけるに
はべりける　　　周防内侍

いはひつる神も三笠の山の上の松の千代をも君に譲らん

題しらず　　　　藤原道経

君が代はいく万代をかさねても猶かぎりなくぞ思ほゆる

宇治前太政大臣家歌合に祝の心を
よめる　　　　中納言通俊

君が代をあさひの山の松の千代なき数にこそ君はそへても

大蔵卿通房
君か代を限てあらし三笠山峯に朝日のさゝむかきりは
新院小御所にて若菜久しといふ事をよませ給ける
大弐内侍
若菜とは君か千とせの春ことにそてつみそへてくみてへぬへき
祝の心をよめる　源忠季
君か代ハとこのまつはの水すまて千とせを掬へ絶しとそ思ふ
實行の家にて歌合ありし祝の心をよめる
みかきねのつるのこゑこそ君か代をあさてや松や花咲にけむ
前中宮にて内へまいりて侍るに初雪
ふりて侍けれは六条右大臣のもとへつかは
しける　宇治前太政大臣
雪積る年のしるしにいとゝしく千とせの松の花さくそみる
返し　六条右大臣
ほりつもる雪にてしりぬ君か代を松の花咲程しらるゝ
天喜四年皇后宮の歌合に祝の心を
よめる　後冷泉院御製
住吉の岸こそ松のねはふかみ次つきたえぬ君か代は
松上雪をよめる　源頼家朝臣

萬代のためしとみゆる松の上に雪ふりかゝりてときはなれ

前斎院文伊勢ありけるに
歌合をせさせ給ひけるに祝の心をよめる

源俊頼朝臣

君か代は松の上葉におく露のつもりてよもの海となるまで

金葉和歌集巻第六

別

兼房朝臣丹後になりて下り侍りけるに
よしあり　　大納言経長

君こそや花の都にかへるともよそにのみ聞くへきかな

返し　　兼房朝臣

よそにきく萬代水に袖ぬれてわかれの涙とこそなりけれ

重尹帥太宰大弐になりて下り侍りけるに餞
給ひけるに　　堀河右大臣

海へき旅の空をおもふにもかへりたゝむことを待つ

題しらす　　よみ人しらす

とにかくに我ひとりこそしられけれ白雲かゝる山のおくにも

経輔卿ほとへてのちかよひけるを上東門院にさふらひけるとき

なり給ひける　前大弐長房朝臣

かゝる身の神もいかにおもふらんさのみそ我をまもらむ

こはまとに詠してさつまよりつけさせ

給ひける　上東門院

おほよそにおもひしよりもかはらねと我のみしりて

源道定大隅守にて下りけるに月

のあかきよにわかれをしみて

源のたかもり

久我にて桜の花を見てとまりて山にとまりける

対馬守小槻のあきみち下りけるに

よみ侍りける　為成朝臣妻

奥津島さゝてまつるをもりて

後朝朝臣伊勢国にまかりけるときよみて

こゝろもあちきなく人の侍けるに

よみ侍ける

参議師頼

伊勢の海のとをきかたにまかりて都のかたに

源行宗朝臣

[illegible]秋の盛を[illegible]

百首の哥の中に月をよめる

中納言国信

[illegible]

藤原基俊

秋霧の[illegible]

橘為仲朝臣しなのゝ国へまかりて[illegible]

[illegible]

前東宮[illegible]

[illegible]秋の半ば[illegible]

藤原有定

[illegible]

[illegible]

中納言通俊

[illegible]月[illegible]

[illegible]

春宮大夫公実

[illegible]月[illegible]

[illegible]時[illegible]

守しも冬二へくだりけるに
橘則光朝臣
我ひとりいそくと思し東路にかきねの梅はさき
立にけり

金葉和歌集巻第七

恋

五月五日くす玉女のもとへつかはしける
小一条院
きのふまて神のとねまてあやめ草けふの露は生ひぬ袖は
女のりにけり〻

大江公資朝臣
しの薄葉にすくけるかのいは雨せし人のなくらん

暁恋とよめる
林張伯郎仲

なりとも思ふ浪は世にはせてまとみえて祢やなからん
たもとにかゝれるなみたのかはらなからん
香文女王
こゝろくし思ふはそれと草枕しらしなつゆのおもひしらすや
顕輔の家にて恋のこゝろをよみ侍りける
藤原顕輔朝臣
逢とみてうつゝのかひはなけれともはかなき夢そ命なりける
源雅光
あすとては思ひもかけぬ涙かな身のいとゝなかれてまさるや

従二位藤原親子家草子合に恋の心を
よめる　宣源法師
今まてに忘れぬ人は世にもあらしおのかさま〳〵年のへぬれは
大宰大弐長実
思ひやれ逢[illegible]みてとしつもる神もしらぬ涙をしのひかねつゝ[illegible]
しらぬ[illegible]
津守国基
あさましやたのめしことのかはりてはつれなき人とおもひけるかな
返しにてよめる　しらさと
返してそ恐るへきものそ世の中はあはれなるやいかにとゝ

千とせふる小島のあるしむつましく家居さためてよろつよやへむ

中納言雅定

あさ日さすなきさの浜の島波のしらあやなきみ声をさく

ある人文おこせて侍りけるかへしに忍ひて文

とかく物いひける女の日ころ待りける

春宮大夫公実

思ひ出やあひしその夜の月影はあくまてかほる梅の匂ひ

題書て寄歳暮恋と梅をよめる

大将公教母

千とせへん心の末はしらねともそのかはりにはちるなかれ

寄水鳥恋といふ心をよめる

源俊頼朝臣

水鳥の風にさはきてのとかなる声もきこえて……

寄夢恋といふ心をよめる

左兵衛督実能

夢にあふとはみてもかひそなき……

題しらす

中納言顕隆

白雲のかかる山路をたとりつゝ……

たのめてあはぬ恋の心をよめる

源顕国朝臣

かひもなきなのしもふれて人もなくまたかくれなき
忠定の家にて　中納言定頼
皆川のまへの木葉もてりまさる下におつるをあきなれや
月かげを待つよはあかす
藤原基光
みしまえのあしまもなきはるかぜにはかなくもなほ月
題しらず　よみ人しらず
うきしとも思ひのほかにさそはれて人しれぬなさけ
物やおもふ人のおもひのなかにまたなき
くまなきかゞみとみつる月のかげかな

よみ侍ける　藤原親房朝臣
おもひねのあふよのまにまて夢のうちにさへ
さめてかひなきまつかぜのおと
つれなきをうらみはてゝ
題しらず
あさましやこはなにゆゑにうらみけむ
梅のはなさけるをみてもしらぬ人
つれなき　内大臣家小大進
かたみこそ思ひいでしかたのすゑにぞ
さとのこの家歌合によめる

長実卿母

きつゝやはしれつる橋とも渡りても立渡るとは

藤原道経

恋偲こかけし神や流るゝ流れの川の名にし流るらん

少将公教母

みちのくの名をたてて立ちし海の人かげみえてきくもみえけり

題しらす

皇后宮右衛門佐

流れ川神もしれ身をせきてしるしありさこそすれ

源顕国朝臣

かくとたにいはまほしさのあまりにもつらきかたみの身をしのふらん

女につかはしける

藤原顕輔朝臣

恋すとも折りしれ思ひのかひなくはいかにかせんとて

左兵衛督実能

会ふことのかたみにすくるあふみともあふ身とは思ひけるかな

懐旧恋のこゝろをよめる

源行宗朝臣

津るかしなきひと年をへてわすれしこそ恋しかりけれ

堀河院御時艶書合によめる

春宮大夫公実

旦ハかゝらハいそちよさしとの山のあなたにしる苔かな

恋のうたを　藤原顕輔朝臣

逢事をいつともしらぬ我恋や杉木の梢の雲の果

みさましくつとおもひかけてしあの

しのんてし　顕仲

いさむしねかおもひにさゝてつむ神ならぬ恋を

滝のくぬのへつせるひとみ付かしくて

さりつてもしいのなかの床の露きえりもまれく

秋恋の　大宰大弐重家

秋風の草葉枕やそと露やたてまつる涙のみん

野分しけるにいつまてとつまこふる

人のかみにらえそとせりあれはけふ

さまり　内とと

あき風の吹しく遠のかへるてにとりくあきのみえなん

國信卿家哥合に恋のうた

源俊頼朝臣

しきたへにおもひの床の枕せるやとあふ瀬をたのむ

五月雨のまたもやしてとりあへるとかよ

さりともとわかれのさきありしをつきまてさそ

なつかしき　内み

あやなくもあはなしとてと思ひけるやとにもものゝおもほゆるかな

同五月の侍りける比しく人とくらし
ける小姫の五月ときゝてまとはされて

橘季道

そこともかくまぢかにふしてあやなきことはゆるさぬ人のくるしさ

人のわすれはつるか　神祇伯顕仲

そのほとにまちしほうしらは海のそこかなとこそおもへや

人をうらみてはべりける

藤原惟規

池にすむしまの名をかへての名人とものいふことやとし

女のもとりて侍りけるにまかりて人の待と
やしきてくかりに名の姫ふてよいのかり
そしやなりなきてといはべりしかは

藤原正家朝臣

松風に吹くるなくさの葉のかし根もなのかつかな

かくはしはべりし人のあるしにやぶれると
れありけるにひかはべりける

菅原有教母

さくらん身をもすてゝしらすてうそのなかにも

長宗家哥合にて恋の心をよめる

藤原忠隆

はれやらぬ浪の雨のしくれて恋する君をなけきつゝ
くとうしみてはこりける

藤原惟規

しら風よさてこの恋のみちまよひてそ悩みける
それ君しらるゝ人のいりはこりける

前斎宮内侍

あさましや手まくらにしたまより涙さへいそのすな
うそつけてゆの恋の心をよめる

左京大夫経忠

一歌といふ事は何ゆゑのありてとこそ申しけるの
ゆゑしらぬ家にて恋の歌十首よみ
ありけるにてあそひて人に侍りける
ありて

皇后宮式部

逢ての後はいかなる世をも忘れし中のゆふくれなれは
実行卿家歌合に恋の心をよめる

源俊頼朝臣

いはとすく恋にいかる我からはかなき涙はかりそのこらん
恋の歌とてよめる

藤原成通朝臣

媒の恋と聞へしくて主師と志なやれてよみ侍さ

摂政左大臣

いかなきハ下つ心の秘とけし浮う恋と念する

かくしハ人の結ハく成くう知し

平わ年はは法れてし声れ

白河殿御越後

待つよれ宵と何し朝夕し思ふ絶てもあまりあと

立ちわつくとよみ

律師實源

会ふとしあて聞りしやすれてそのゆへ志ありる名もちて

皇后宮美作

見え絶くれてへぬるとこの小のはかたみとりにする

椋宿の恋つらくと

摂政左大臣

見せはやな君しい秘の手枕ゆきくる椋の下文を

堀河院御時艶書合によみける

皇后宮肥後

思ひやるとて身の上のみ月夜の光月とりて袖の言よ

皇后宮にくへて恋のうたよみける

おもし移文といへるよ代

寒濃

二世かけて人のつらけれはしも思ひ出つゝまさ
くくる恋の哥とよませ侍りけるに
よみ侍りて　摂政左大臣
ふきかへる秋の霧のはれまにも見えぬもなし
思恋といへるを

しのひつゝ

志のふるひて流の浅き川浪の音も今はたに
雲居なる哥合よくよまりて恋のうたを
よめる　三宮大進

そもそもかくかなしき人を逢ふことの人にあらぬ
寄花恋の心をよめる
摂政左大臣

あたらしく人の心をも筆にもかきそへむ物とそ見えし
百首の哥の中に恋の心をよめる
修理大夫顕季

わすれなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまつそかなしき
摂政左大臣の家にて恋の心をよめる
源俊頼

あやしくもいつはりとしてまちつとやいかにしのふる秋のあはれに

寄山恋といへる心をよめる

左中将公長朝臣

恋侘てせめて今その山のはにかゝりし月のかけはかりたに
流れ出るをりふしのゝりしにみえし煙と
ミしつゝりしなる

藤原公教

うきを猶逢見しからにあひてしれは我恋をおもひかねつゝ
後忠乃家にかく恋の二十首人々
よみはへりけるに雖逢不逢恋といふ心を
よめる

源俊頼朝臣

思草葉すゑにむすふ白露のたまたまきては手にもかゝらす

女とうらみてはへりける

春宮大夫公実

恋わひて身にあまりてそ思ふとられぬ我身にあまりける色と
主服ゆ成てもりけるへきかくしかなわかたる
てこひしさりわりなきてはつゝしかる

橘俊宗女

白ちみつきたりとあつる夜毎なき桂もねかさねと回
恋乃山しけきをさゝとけふかりて

前中宮上総

不かけるかの瀧の乱れのとつやくしの声にゝぬみる恋ぬるかな

なのめてそくしたる葉をみかて天ることあくとまほ秋の
露の命そ　皇后宮女別当

金葉和歌集巻第八

恋下

えし絶えたる恋の心をよめる　良暹法師

かすそては思ひ出てつつ忍ふれやそてまつ宿もあらせけるかな
云住て宿わかくは葉あとの橋をて恋と
三なんとそとくてりし侍せうるにこそ
くまりにてをとこれつくはとふゐまりて
三の趣をこみしめる

範永朝臣

恋わふる人をやまの葉もしたりみちすかに揺て

後朝の恋といふ事を　源師頼

きのふ明ゆくそらくもらぬ海をかすみてまけり

月前恋といふ事をよめる

内大臣

いかにして西都にあらはしてこの月とことゝまりけむ

恋の歌とてよめる

藤原顕輔朝臣

恋しさそ終のはてにはゆきて女の枕へそとくなき

鳥羽殿の歌合に恋の心をよめる

藤原仲実朝臣

しともしに袖のみのみまつる恋やうき海の破れけるほれ

暁恋といふ心をよめる

中納言雅定

逢ことはいつともしらぬ月ありて山の風またさそはしし

恋の心をよめる　右兵衛督伊通

山の井の思ひは思に新たなれかしけれは

皇后宮にて恋の歌よませ給ひけるに

しのふ　大宰大弐長実

みちのくのしのふの山のみの

奈良の人々百首歌よみける時恋の心を
よめる　　権僧正永縁
いにしへとなりにし人の音にのみきゝてもつらくなりにけるかな
恋の心をよめる　　隆源法師
今日見れはさらに世にふる身をつらみ我のみ恋にしつみける哉
源の家時かもとにてよみ侍りけるに恋の心を
つかうまつる　　前中宮越後
今はた浅き心のほとやしらせむとかくはかりにもなれるつらさは
俊忠の家にて恋の歌十首人々よみけるに
あふ事もなきに心をつくしつゝうき身ひとつにいつまてかへん

修理大夫顕季
いにしへの都三笠の山の長き夜の露に袖はぬれまさりつゝ
我としもいつれともなくつれなくてまたそのかみの心をそしる
てなからん　　しらぬ人にそ
かきりなくや思ひそめけむ梅の花さくらの後にはちるよしもなし
郁芳門院の根合に恋の心をよめる
周防内侍
恋侘てなかむる空の浮雲や我下もえの煙なるらん
前斎宮河内
あふことはかたのゝ小はらをみなへしあやなくたゆる秋風の空

恋のこゝろをよめる

大宰大弐長実

待きてと思ひしものゝあまりにも恋しさにそへて思ふらん

題しらす　　前中宮上総

こひの世の契りはそれもかくて人をはらしとおもひ合せは

恋はすまじかりけるものにてよめる

源俊頼朝臣

忘草種をさへこそこれとおもひのこさしも涙かな

人を恨てよめる　　よみ人しらす

今はわかれしてのち恋しとはゝこそのちの契と

逢不遇恋のこゝろをよめる

左兵衛督実能

思ひきやあひみしよはの後の津に紙のかたとは

人とふかたの歎きの例すら覚えてそれ

はかなしな　　読人不知

あふことはみなしはてし世の中は我身へ命たにしらぬと

女かへらはてはつる哉

藤原永実

すゝ墨は津の海にもとまれく恋とたえまなき

家のうちの合ひろてかへる恋の身をしる

中納言国信

多くみるなかには志りしまと淡えん志るの人たらされ

趣しらと　しんそしら次

あ事は号からてやさしきことはそらもこ殊子

蓋懐の時猶く蛛の井にかかりてや来其我意

大納言経信

藤原忠隆

たえ出とあまる淡たりの山の歌さこにうつ志き淡然わ

くと恨てみなそれなり又ある月をこて

しあ後

橘俊宗女

いふきしまきかの森は志をき程と木のまの月の淀をさなき

物とまこうの人の又まさせにてはれてにつれたる

前斎院肥後

かやうなれとやとてあはれにまさりたくそくの言葉もよ

人なからはずらしけり

左兵衛督実能

我意の世ふかられ色てやくいつもいふかれかりかと

とらのりし新古とまらまことにさつる事

あって入りまうの嫁みさきけやとくるけり

と云てこある

春宮大夫公実

おくら沢路の流れに成りし秋すぎてかへりなきかれ
冬恋といへる心をよめる
藤原成通
水のおもにあらはれて雪の消えやらで海人のつきに
多聞としるらんを（?）よしやりそれ
ありて見えし月のあはれなり
かしらる
権僧正永縁
まつ人のこぬをまつ月のあはれにて袖しけれこそよし
寄水鳥恋
摂政左大臣
おもふ事のみなそこにすむ鴨のうは毛の霜を人はしらじや

人とふ人もなし
源盛経母
さのみやは我がかたのみてそこ人の心は根深かるべき
摂政左大臣家にて恋の心をよめる
源雅光
名かへてあらはれて海の底なるしつめる経
うらみ（?）しあまりにそ昔思ひ出
ら苗とよめる
前斎宮甲斐
今人の心に秋山そて尋ね来てあはれ苗、
忘れてありし人の思ひそこにとまらぬ

ありにあり　　橘俊宗女

絶はてしや思ひなかしと思ふべく絶えて思ひあらん
山のはをあかせし恋の淡にあり

読人しらず

世の中は小蓬萊は夢なりて恋ひさ[illegible]なりぬ人
伊勢でしも思ふ人のなにてありぬらんさする

やよひなれて　　藤原章経

恵まれる先しらず梅さく風をかりけるぞありけり
伊賀の少将がもとにつかはしける

前律師仲

よもの海うらくにかきおきしやしなみのみいかなれど

返事　　伊賀少将

身にしみし涙の三もあるかは何思ふともひとつの露

題しらで　　上総侍従

あまりにて海てるも我身なるかはりくはれてはきのしまと
物へまかりけるみちにて物のあはれなる
ことのせをさして上東門院にまゐらせける
しはすと千しりとひかくとさしてよめる

源縁法師

花さくらをりてさらるにみてもあはれなるらん

恋の心をよめる　民部卿忠教

忘らるゝ絶まのほどのやすらひはまことの風のたよりなりけり（婦人）

女なりしにはつらしとや

大納言経信

あふことはまつにつけてもなげきつゝ今はと思へば

人しれずかよひける女房のもとへゆきけるに

出でゝもえしらずかりける　藤原顕輔朝臣

今はとて思ひたえなむあさましやいかにしてかはみるべかりける

堀河院御時艶書合によめる

中納言俊忠

人しれぬ思ひありその浦風に波のよるこそいはまほしけれ

返し　一宮紀伊

おとにきくたかしの浦のあだ浪はかけじや袖のぬれもこそすれ

今宵とて待ちける人の月の出るまで見えざりければ

よめる

摂政家堀河

契りおきし人もこずゑの月影のかたぶくまでも見えぬころかな

江侍従

荻の葉にそよぐ風の音せずは誰かはしらむ秋のゆふぐれ

国信卿家亭合に初恋の心をよみ侍とて
侍り　源の[illegible]
冬そハせの霜の下に葉多ていつまてか露(?)
雪のしたにそ思ひ年ふりにしわかくり
侍りけるとて返り侍り
いてへの弁
逢りてハ人重と思ひ玉めのつもすゝのみえぬ心も
返事　大納言経信
冬枯の雪風にも出て新なるやと
まことぬらぬ恋といふ涙かな

前二条院六条
中々に忍ひはてなん世の中の人の名たてに
世にあらん限りとてしかも人知
人しれすとて重なるあはれなり
読人不知
人知れすおもひやすらん思ひにもあはてや
やまもとの人の涙てとゝまりけり
あやしくたつ名
こやくるゝ浮きてみえなくしも山河の
趣らとて

ちゝさるやはや吉川のはやくしけふは人しらぬ心にも

おもふ(?)ことのなかりせは(?)ともかくなる(?)をと(?)

てやりけれ(?)

春(?)七二(?)も(?)のゝ(?)みちとけ(?)ぬれ(?)てかなしからん

明(?)恋といふ(?)心をよめる

藤原敏(?)朝臣

捨(?)ゆくころあたりのおもふ(?)人しら(?)ぬ(?)へきことをきかは

人のもとに神のかゝるにとをさや(?)

よみ侍(?)しける

皇后(?)文時(?)

うしとてもみるへき(?)ものを(?)あり山(?)の(?)峯の(?)秋(?)かき(?)人

旅宿恋といへる心をよめる

修理大夫顕季(?)

恋しさをいもしるらめや旅ねして山のしつくに袖ぬらすとは

人めのみ(?)つゝましくてこひしくもえ(?)こそ(?)ありけれ(?)

しのふ恋

一宮紀伊

うしみよ(?)の影(?)みえぬ(?)月夜(?)ははるかの(?)くもの(?)なみた(?)にやとれ

蔵人にて侍りけるはしめ(?)とまり(?)ゐて(?)

女のもとに(?)つかはして(?)よめる

藤原永實

見しか(?)月の(?)のみゆ(?)かる(?)恋(?)つゝいまもあらはれこひ(?)しかるへき(?)

周防の内侍こもりゐて侍りけるにつかはしける

此ほとはすみかはりけむ宿にてしのはれけるかな

源信宗朝臣

あさましや我まちわひてなみたにぞそてのかはくまもなきおもひ

すへにそかへるへくもあらし

左京大夫經忠

人志れす涙の川に名はたてとそてもひたすになかれけるかな

人とふへくもあらし

大中臣輔弘女

あはれさはいつの月のそらにかもみえけむおもひをはつれ

三井寺にて人々まうてけるに

僧都公圓

ほりしともおもはん人の世にしあらはいまはとおもひてかくてはてなむ

かはらぬはわかみのうへのこりしかとはかなきよりもまたはかなくて

わすれとはおもはぬものをいかにせむ

五月の比とふらひ侍りける

人にかはりて

五月雨のころたのみをかけて侍りける人のもとへ

返事

大蔵卿實能

わかそてのぬれむよりけにさみたれのそらにもみえぬ月のかけかな

題しらず　　　　読人しらず

天雲のたつの風の音をきゝおとろかれとやうの晩の
足引の山のかひにも聞ゆるをまつらんはなれとも
なく（く）わが身のほとりにはよるべもしらぬうき
津の国のなにはのあしのあさからぬ思ひはせきかねつゝ
おもひては夜をぞ行にはてはするまよひの月を見て
出でより空をながめつゝ雲のかよひぢをこえ
こゝろはあはれにならぬものはかなきのみにしを
おもひさだめしなく〳〵もおもほゆるかなしきの
人のをしみ（に）あはれとぞ思ひつゝしらぬけしきにいふみやこ
おもはぬは（に）なりにけるとて中にいはゆるたゞ逢
逢事はなほさやうにまかせよとてひとはあらはれ
なほかはりにし身はいまだおりしも浪のしづく
あつまのかりかねてもうちもあれやと山見にながれんとすれ
たまとはいかゞせんやの枝にあたりて身のうへにかゝらん
かきくらし山の下風の水ある海をかりてあやなくなり
ねとくとはとりさえてしるべもなくたゞにはなれて
これもしこやかくのみありけるあるべきおもひや

寄石恋といへる心をよめる　　　前斎院六條

逢ことは梅石神の浮きまさにかゝるつのさとにかな

摂政左大臣家にて恋の心をよめる

源雅光

数ならぬ身をうち川のはしはしといはれなからも恋わたるかな

恋の十首人〃よみ侍りけるに

よめる

修理大夫顕季

玉津しまきしうつ浪の立かへりせてやおもはしみそなれとも

恋歌とてよめる

春宮大夫公実

あさましやこは何事のさまそとよ恋せよとてもむまれこぬ身を

藤仲実女

いつとなく恋にこかるゝ我身よりたつやあさまのけふりなるらん

同大臣家小大進

かくはかり恋のやまひはおもけれとめにかけてあふ人しなし

摂政左大臣家にてよみ

侍りけるによめる

源顕国朝臣

我恋は賤のしけいとすちよわみたえまはおほくくるはすくなし

恋の哥人〃よみけるに

源俊頼朝臣

あさましやこはなにことのさまそとよ恋せよとても
生れさりけり

金葉和歌集巻第九

雑上

昔道方卿にくして筑紫にまかりて
安楽寺にまいりて侍りけるに見侍りし
梅のわか任にまかりて見れは木のすかた
はおなしさまにて花の老木になりて
所々にくちたりけるを見てよめる

大納言経信

神かきに昔我みし梅の花ともに老木と成にけるかな

山家暮といへる心をよめる

摂政左大臣

峯ともに世のふるてもあはれなる花の苔のしたゆく

圓宗寺の花を所望して堀三条院の北

ふた本をりて出してまゐらせける

三宮

ふるさとの花を世にまつ色も我身なりけれ

花見の日筆をそへていまいりたる男の御もとへ

つかはしける　　権僧正永縁

もろきのたちしらぬを思ふにつけても世にへならむ

こそ

妹内侍

昔ならぬ色香にしのぶ心にはなほ花のうへに花の色ことし

大炊にて思ひのほかに桜花のまにまにあかりける

ときそありける

僧正行尊

ふるさとに春をへて山桜花もおもひしられけるかな

堀河院御時殿上の人々さそひて花

見にまかりけるにまかりけるも家朝臣

のきてて檀紙やありとて侍りけれ

花のみわきぐるまにて書付侍りける

源行宗朝臣

行くと見て秋ぬめりんとも人の花みるまでとまりて

山川にせくてまいりて花のちりかゝるかな
しあり　　見れりとの河このうへ
みよしのゝ山の桜花折りしつかたや右近権
後三條院く重にまいりて又のかへりに
盛りの花をみてしあり
左近将曹秦兼方
花かへしよ遊てつゝしと霜をちらさもえてしもはおもはぬ
河さえしのはなやましきとのゝみえぬれ
しあり
藤原顕長朝臣
年ことにまてつきぬ[illegible]はもの[illegible]しつる

蔵人にありてつかしのまいりれ侍し
あるよ右中弁伊家かりしてりけっつ
よみ
藤原惟信朝臣
山桜ちる所の色つれと雪ふの桜打ちえてよ
あの家れつ大宰帥りけるみ盛く坂の
ひ嘉権帥りおつりさるとけるし神主こ
えれとし松のてとおりて帥のかへり
ふ河をかへてしある
神主大膳氏忠
よつやまりしみの家の松のかぜにひきはる春そ春

源公天台座主行慶くたりしそ山のへ
つかうしやすらふ所にてよみ侍る
きゝてよめる　良宗法師
かくてしも海山ちかふ神と名にはゆふへなきさを
我京も春しの花くへて爵御母
乳人の母なる　藤原家隆
思ひとは明けてやうしんを流しひち露をて
一品宮天王寺にて海のつけ行く日を念仏せ
させけるによみける人くて何事さへあへ
ことしる名にかる　源俊頼朝臣

いくそゝも咲かさん信者の身とも神代の御としるしきけ
田家老翁といへることをよめる
中納言基長
海とかく山田の鹿をとも今日は狩せんいかにせん
仁和寺にて院せ給ふ時法にて侍くは
またしくしあへる中に月の光を海
せ給ひける　三宮
かくてもえ花流しき山里の月を見てはのさらに
是のみやはくもかゝる
信正もする

草の庵と何露けしと思ひけんかゝる名残の袖の涙を

つれ〴〵やう宿に泊りしとうらみてあかす夜

ところも月の清かにはらてきて又のさ

きく見てしらぬ旅にはらし有

律師慶範

まつ山の松の日浅くはてゝ又何にいそくらん

對山待月といへる心をよみ侍る

藤原雅季

世の中はいかに出る月を待ちしかどやすらふものを

山の端にして有明の月とみてける

僧正行尊

本つらにかくる月の影のみや涙にぬるゝ袖と思ひける

宇治にまかりて長時の寺に泊りてよみ侍りける

絶えて月のさしも宿せぬ身なれども絶え

ぬる袖の月の影をとゞめける

源師光

嵯峨山を出てゝ月影の昔の様にかはらぬ

信都頼基光明山にこもり侍りける時

て月のあかりけるにつかはしける

橘能元

うちやすらふ秋風出ていさよふ雲の絶間より月をみるらん
同し　　　　備前 頼基
よなかにしへやもりし月影の雲ゐにさえてさやけかりけり
郁芳門院伊勢よりまうけの比よう
こゝろ下かゝりたりけれはかはしとつかはしける
しのれ　　　　六条右大臣北方
ちかくしる雲に流れて行川の思ひの底にまさる心の
源氏の君のゆくへしらるゝ昔の友なれはこそ
いまそありつるいにしへをかよはせて
出てゆく月の光の影こそいまはさやかなりけれ
うき世にてうつろふ月のかけにすみて
むらさきのゆかりをしのふ春雨
　　　　摂津
翠なる松にて風ふきくる昔の友にしもあつまれ
同し　　　　美濃
すゝしくも秋の山風ふきおろす雲の峰なる
人まれにしとこてあり
　　　　内大臣家越後
みそら行月の影もうつるやまとのはるのことはりの

伊せ人はあやしきものをなとてかくしあり

大中臣輔弘

むかし家経にしれ滝のもとにまちてミゆる松の垣

宇治前太政大臣布引の滝見にまかりけるに

ありけるともにまかりてよめる

大納言経信

志ら雲とよそに見えつる布引の山てミ滝のひかりなりけり

ミ河山生やなみれの書かんきたりつゝ布引の滝

見えつゝ守

選子内親王いつきにおはしましける時女房

物やさしくそてひちて海の月のみかけにひかれつゝ

ミて、かそく人をもてあつかひ侍りけるに

侍りけるにたちよりてこれをよせ侍りける

藤原惟規

水のひの木のまにあれてみなそこの月のかけのかけ

郁芳門院いせにおはしましける時の歌合に

右大臣ありける時ときたりけるをよみける

ゆきとの秋のゝ花をみてくれつゝ

先ス

六條右大臣北方

神のひのあたりと思ひてかくこそ思ひて何の浦嶋

花寄文伊勢なりしおりよみける時群頭
保後也奈のわとこの井もりのまうに侍を
かりてほとすゝきていきて思ひて
うつきはりたるいことおとやありける夜よ
としつりける歟　内侍
かへしとり樋てきこりける夜あかきまことかたりの程

和泉式部保昌にくして丹後国に侍ける
ころ京に歌合ありけるに小式部内侍
歌よみにとられて侍りけるを中納言定頼
御局のもとにまうてきてうたハいかゝせさせ
給ふ丹後へハ人つかハしてけむや使ハ
まうてこすやと申て立
けるをひかへてよめる

小式部内侍

大江山いくのゝ道の遠ければまたふみもみす天橋立

七月湯あみにしなのゝみゆへまかりたりし
ところにかへるとて思ひのほかに侍て
秋まて侍りけるにしらのりへけるまて心
あるしある　平康とゝさ女
儀みつしへ江の波の立ける吹こゝまて乃命ともかな

臣事　娘

千ゝわたる海士の志まきとみえて沖のゐさり濃

百首歌中に旅乃心をよめる

修理大夫顕季

うたゝねの夢みらせてあけ昔乃人と逢ふ事

旅宿のことをよめる　参議師頼

こゝ中とぞりつくりみちのくの浅乃浦の月

公集撰ひけるとさこれを道とてよめる

藤原顕輔朝臣

家乃はなみ物ゆくへりの女房の美みかける

和泉式部石山にまうでけるに大津よ
りまかりて秋あきて関のあれて人なんよ
はまこ志くもしのあるとみえ下
人のよしあれはしけるとよめる

和泉式部

鶴乃けり杉原にふきつらん志に雲とゐ
公室にりしにかりそりきる母ゆきのあれ
おもをさゝりあるこゝ中とよりてゆくに
くともれくかよゝけりのつりてらと
あ川将軍家にて時房にかりぬとよと雪

て鳥羽院のはらにておこせしとひはへり
りしをりあはせて御はらへり侍ける時

藤原時房

桜さくはなりぬ吹からふ風程なくてやい
花とうつりしも盛りけりつてたのむ世えて
婚くへりなくて見ぬよ宗り工しとやしと云て
千年に言ひかへりてよめる

春宮大夫公実

千代若もそへの代こそ言ひさけ見しまてよみ給
大弐資通志のひさしふ家のはしとかく

はそふと人のかへしにかきてよめる

相模

いかにせむ山田にかこふしし見しにふく風
備娘内侍書けり見られたく歌とあそひて
しらをけるよ　白河院御製
見て後に歌たりし給ひにあふし袖のいたつらに
あ車をそてよめる　信ミ川
やさせて絶へかりも水車秋ほしれ世ものの枝
別あるはありて松そるころ上東門院
小式部にそまうでてへりよせて参りける

堀河右大臣

はへはつるしのゝはすゑも玉のをのしはしもたえぬなみたなりけり

出家事　　上東門院

こゝろの月の光をさしはなれてけるみをとふ人も長歳あり

信心もあらはれて来て世のうちに入てあはれとも

てはなしてこそはてありあはれとそいふ

はそとてもあり　　大納言宗通

草のいほりにこそは様々のこゝろはおもひしらるれ

置つゆのきえてさへこそ蔵しけれ嬉しと思ひて

こゝろのうちにもしりにこそせよ

はかなくてはかなくなりぬ　桜井尼

わかうちまきの寝のこゝろをはなちてこそ思ひけれ

後冷泉院御時白鳥となりた

つまかとかりてとせ行のゝりゐと沸

女房達ゆかりかわりて若うこととも

みてあてはつまのみかへりしてまた人々

見えしとおもひしとのみもありしはしも

返哥　　少将内侍

たのみなく世をはかなくもなき人のゆかりを深くなかるゝへし

甲斐国よりのほりてまうつるへのかへ

なかりけるき事しるてなりけるとてはかはね
ゆるされにけり　人々さらに
思ふこのまこといるあはせかして御ハ色かさねなから
百首の中にも常とよめる
陸奥大夫筆
月ころの思ひ侍る雲の上に八合の月すみにはなせてそろ
題しらす　藤原仲実朝臣
日ころまてまていつきにしと君と草なれ
殿上ゆりそんとかは人の殿上しけるとて
よめる　源兼綱朝臣

うらやましもとの籬に立かへりおのれをたつねて
殿とハ宗かりせかりまかくしよめる
平忠盛
思ひきやわか身の月をよそにしてへのやうにおもひしあとへ
かこつ人の心のうちに成しまてと
今ははてはかつの心のいとふにし
おもとやかく男れりしの風かきき
りしとハたりまてつくしそいはかり
内大臣家小大進
かみとハこのこにそまてへたつの月にさらぬ

かゝるところにてうきよにすむ人と申へし今は
名所にあらされとまうてきたるかへりなれと
何にてもこの歌の由へ多くありつゝお
今更にかくいふ事のうたのよしある人
そこにあるへしかたかるへき歌に
侍るへし名　後ちらせと
経信のいひけるのちにかの人ゝ紙に書て奉りける
源頼家の朝臣はその人の五節に出侍るを
ませにしやかてさすけ給ひて
心よせありけるのちにそのきさまに見え侍り

つゝりあまりにかく
源光縁母
日本紀の左大臣の右大臣の家にてよしと申ける人の
経信のいひけりてはへしまかりたりける比
晴れぬとそいひけるのちにそかきなせんとし
てまゐらせたりけるにかへりてかなしかりける
名所人　源俊頼朝臣
古の宿のあれたる住まひたりし家に風の吹けるを見て
大峯の小笹生ひたる道のほとりにてくちたれて
同行の心さしありけるを見て浦のわたりに御覧ける

はやうにはある　　信正朝臣
見し人を待ちかねてそでひちてと待ちかねぬ涙なり
そでのぬしのそてぬるあり常にはたえぬ
うきてたまのりとうかんたる枕まなかた
まされしある　さんくつらす
葉にはれたるとみえて袖にこぼるゝ玉露
堀川院御時中宮女房達並仲實朝臣の
紀伊守にて侍りけるときすまの浦にて人々と
てけるに歌よみあまさ侍りける侍りて
侍りつきを　本中宮甲斐

人ごとにかはるなる立ちてかなしみたる紙にてする
やかきしるしの日つけりてはりてるのおもの
下は常にはのこるとも世にはあらの
うつりしとやけるときよてよめる
藤原實信母
ちりしやくる絶えてのちに鏡の汚れし紙にみえし嬉しさ
月の入るをみてよめる
源師賢朝臣
思ひやる秋のあはれ見えぬときにしやう埒の影月
あかなくの胡たゝし浮る国の出でもてゆけす

延保しけるとてはべりし百首

藤原定家

もろ秋は哀やまさり成らんとおもふ庭の木の葉の散りゆく

志ぐれゆく人の袖にかかりて庵のあれま

しられとや空にすまてしらる

藤原実光

見るさ山秋の志ぐれ遠くなしもあれぬるを見送れる

庵の風の後に志らでもの散りなし人くれとも

らく年とこの宿の前をしある

藤原家隆朝臣

ねぐらにてことにさえ志ぐれの深りや松の志ぐれ成らん

題しらす　読人志らず

あかさきの思ひ出つる人を見るもとどこほる深い成けり

上陽人春寂多少者老忽者となりぬと

らん

源雅光

しらぬかみの深く成ける歌のことをおもふに

青黛畫眉細長とへ庵のかき紙にかき

源俊頼朝臣

ゆりもかきすまさのけふのほどと老ぬらん

まゆをいく殿りしてつつてあるもの験

竟宴の事を師家卿さいはひありてとはれけるに
のぼりやせましこゝろへてすこしおもやしく
金つまりけれは見せましを待てかくつゝまする
儒よりさきの人々そしものかにたうしありきを
ならぬ人々も無用の様などとまうしてよめる

儒匠よめる

つもりそ世はゆく待つ海はつへ治も人のおもひ待たる

大中臣輔弘祭主にてありけるに祭主を
ゆつりて大祐定かやて得りけるに
長夕に枕をならぶ人の立てまかりける

草のなれよひくきゝし涼露の方の花をさく欲の比
六条右大臣六条家継りて泉の流れて
心くみりて見しよりもわか身の続くよめる

顕雅卿母

子をおもうさしき泉の底しらで親とあらへくは思ひ

宇治平等院寺主にありてうちに思ひを
はきそのこの山のさとをおもかけてよめる

喜撰法師

宇治川の底の名をまかせよ打たる山の意き
家といふよりもてさりてさけてにつき

題しらず　　　　　　周防内侍

すみ侘て我さへ軒の忍草しのふかた〳〵しけき宿かな

賀茂成助にはしめてあひて物申けるつ
いてにかはらけとりてよめる　　津守国基

雲海のうちたえし河の水清き庭のうへとそ今
見し

　　　　　　　　　　　　　　　賀茂成助

住よしのひさしき神のよるこそすめる(?)のとも志ゆ
皇后宮攝津(?)殿(?)にまかりける(?)

ゆくらまてそのほとそ(?)ちちまつ人

小神にかよひし(?)春の雪くれは(?)
なにはをとめのふるもとをこそ
しもせやと女房の石ならぬ志(?)の
ゆくりなきこそ(?)……てよめる

　　　　　　　　　　　　　皇后宮大弐

石(?)をもてかよふ庭と思ひきや思へはもとのかなしかるらん

大原の蓮上人のもとへつかはしける(?)とて
よめる

　　　　　　　　　　　　天台座主仁覚

あはれとも思ひ出るかなれ(?)ともなし(?)神もなくなく

百首の歌中に述懐の心をよめる

源俊朝臣

年ふれとかはにはつかわれや思ひ極ましなきならむ

こゝに小松そ越の国しらぬとおもひなから

男のつかへて常にいひことありけるを

その人にやうへきにいひつかはしける

読人しらす

しら雲も今はへにあまる山のはつらに包き振ける

とや

返し

思ひやる心はそらにしたはれて山のはの風きい

思事ゆるしなかる　参議師頼

いそにのみ月のかけそとまりてまほしきはかり

鏡とみるは影のうつりゆくとそしらる

源師賢朝臣

かりもとを紀のゆきとみえしは花の盛に散りけむ

東三条太政大臣家にて侍りける女を中納言忠宗

思ひとか将監頼国朝臣ともにいひ

侍りけるにまたそれよりけるを

忍てまかりしとかやて女のもとへ伊勢へ

遣はしける

源頼国朝臣

もろともにそれてあひしのくはかりいはまし

老人懐旧といふ心をよみ侍りける

雲の上にて見し月をしのふにも思ひ出らるゝ世々の面影

藤原公教

堀河院の御時蔵人式部丞忠守

申文にそへて中納言重資卿に奉りて

侍りける時よめる　源俊頼朝臣

日の光あまねき空のけしきにも我身ひとつは雲かくれつゝ

うまとそしけるく周防の男をかへて

これをみてせし卿とりつきへ流る

ありける　周防内侍

いかにせむ雲の上にて晴てさやかに新しき春たちぬ共

題しらず　皇后宮美濃

しほ海と行てのとまりのあまの苫屋と見

山の端に月のかゝる木陰の海と

かゝる闇てもあれ

平康貞女

伊勢の海のやしほのかりまくらの浪

かゝるも

金葉和歌集巻第十

雑下

大貳卿に侍ける坊の家焼けたり
けるあとに梅花さかりにさきたるをみて

ねもみえてけふりてゆくらむ(?)

藤原基俊

しかりとてあとなくなりて梅の花こそ我やとにけれ(?)

中納言実行

うれしくも花のさかりのこえてくる(?)木のもとをこそ尋ねきて見れ(?)

くてやこそ(?)ておもひこそ(?)見て過ぐ(?)

おりしも梅のはなの(?)さかりとおもひし(?)を

ことしもなきかりける(?)

平ただもり(?)

桜花さかりにあひてそ(?)みるべきに(?)

後三條院かくれおはしまして後五月五日

一品宮の侍女(?)菖蒲をふきけるに(?)その

ことはりもなきにしもあらぬ(?)よにあり

藤原有佐朝臣

あやめ草袖にかけつつ(?)昔をこひ(?)ねそかかりける(?)

小式部[illegible]失せ侍りて後上東門院よりたまはりける(?)

なにくれの　　六條右大臣

難波えの蘆のよしあしの志るしにて中ゝ無とゝ

郁芳門院くまかりて又の年

の秋忍びてまうできける

やとゝ宗の母

かかりしに花はかはれとも思ひのとゝまりし昔の跡ま

下離てこらされて跡ゆかしき比よめる

源俊頼朝臣

もろともにあひみぬ海のそこゝやかれとるのかはるゝ

律師寛深わかりし小女房の衣くやう

きんそこしゝせゆかれて山ゆりとらけるよし

ことを布施しきてりうるゝとてりて刀を

そへて結て作りける

讀人不知

玉くし家けるに着て上へ竹ゝ花を手にもちて

いはらよりしほいてゆりかてりくるよし

法師侍りけるを

あふ小海きの栩さりかんとりこの風へとまきの花

けなき知縷よとれしゆりとそ此てゝ

いはきとりけるへのきゝ続てゝうきよ

ことて

藤原知信母

さ待てもみをかへりかり涙にこそあらめ浅緑にさへ
つらきみかさねこゑ人のりしらへいゝるを
中なり名まへきとて　読人しらず
吳竹のよしつるひ露のまにも思ひなき名かな
昆氷朝臣初家にねころて仕奉りて
ゆりなおもひのかよひ侍りつる

藤原通宗朝臣

しきなみのよせしとねとまくらにつらなりにうちよする
律師長済身まかりて後いひつかはしける

とてありし家の歌合にみえ侍らず
あるちのうたをえらびて秋の中のはるをも詠みなき
歌仲にてしとけふとりもて歌よりけるに
けふくみ侍りしとてよめる

大輔の近房

世の中はこの歌やまかりてのちあまたの世に侍り
従三位藤原賢子例の如くあるてまつり
わくらばにへのりしらへいゝるを思ひ
ぬれてよめる

藤原賢子

いかにせん月とのぞめ雨の今こよひまつ秋が露なる

かゆりて侍るにつかはしけるを返し
てよめる　権僧正永縁
夢にのみ昔の人をあひみれはさむるほとこそ別れなりけれ
人かへしてそれ母の許へさらはたらにとよみ
いとてかく侍りけれはかなしとて方にわ
しろ寺　讀人しらす
露の身の消えてもとてあらん萩か上の雫ならてもあらんと思ふ
小式部内侍うせて後上東門院より年ころ
うつかへりけるきぬとあてなれはつて
参りけり小式部内侍とかきつけて侍りける歌を
とてよめる
和泉式部
もろともに苔の下にはくちすしてうつもれぬ名をみるそかなしき
ちさしき人のみとかきてつゝみそへて侍
あつまにてよめる　平忠盛朝臣
今そしる思ひやりては世の中の浮きにのこりの神とは
陽明門院にまゐらせ給ひて侍りけるに
つかはしそへ文れ日雲のひさしく見え
てよめる　若菜をけの
いさら世はかはれもそ哀なるなのみ思ひ出て
白河女御にあひて侍りての家の亀のふみ

萩花さかりにさかりの比にてよめる

僧正もよめる

草木まて歌よむともしれは萩の花をまなふ
蘭房胡臣重服小歳をこゝろめて僧
家のに於羽年のいとらをなくかすら
とよしせしとや申きはあり

橘元任

かすさめのゝ名字風をかしありて人をみ風や
のりふの胡臣母なくて伊与の国へ下
向りかに正月より二三月まてとか詠の

かすさめも後て苗代まてはくさなれを萬え
れのるへてそへこゝろをみてちる能因寺
しらそこ花りけいせそ、のきとかをれ
まいりてよめる　　能因法師

天河苗代水にせき下せ天下ります神ならは神

水戯かりて三二夜ちかりてとやは
とし家集に見へてあり

公經くやらしてそのとんて良意の次

桜政左大臣

あとめてしもとけれはれとれのちのいなりとれけ

法文ありけるを聖天の女房の文によみ侍ると
色も香もかはりてかへすともいかにてもふかきを
なすてよ思ひかな　三宮

見る人に我はわかれとえそしもしらまし
月のいりつるを見て醍醐上人のもとへつかはし
ける　信心行尊

闇き世のつきぬを照らす我もいりぬる秋の夜の月

寂蓮上人山寺にこもりゐてさみしさにつかはし
ける　静巌法師

これならぬ法をもとめてかくはる義はさらにも無と

八月ばかり月あかゝりける夜阿弥陀の心
をよみ侍りしにせさせ給ひける女房の
もとへつかはしける　選子内親王

阿弥陀ととなふる声に夢さめて西へかたふく月をこそ見れ
例ならぬことありける比いかにすべきと申し侍りし
つかはしける　源行宗朝臣

いまさらに此世にかくてすむ身こそはかなくつきなくと
法花経の心をよめる
皇后宮肥後

ときをまて入る月のみちかせはそふそ　さそひけり

湛上人後生をねかひ侍りける夢に枕
かみに偈のこゑしてきこえけれは
かくはかり弟風にたえせぬ声をとて垂迹しるしこそ有けれ
善導十願の文より和歌始歌合侍時と
いふ心を　覚樹法師
念をせむとこと読みたる人のほうをこそはたのまん
弟子為の心を
信正静円
吹あらし諸の山風まかせて花の色を見よとこそ
性海為の心を

瞻西上人
法の為身を捨てことせてやすき法をきくそかし
皇后宮権大夫師時
名をなに薫ぬを捨てても月を宿さんとこそ人の数とへ
浦出為の心をよめる
権僧正永縁
身をちにはてなしたまひへ恵をこえて逢なん
不軽為の心をよめる
かりにてもさとの心をしれる人そしるへき
菩提為の心を
懐寿法師

これ世ゝに法をときけんあさましや法はさとりの名残なる

人ゝかりとかく経くやうしけり五百弟子
品の心をよみけるに元霊鷲法のさとへ
とゆるとまきてたゝしらぬもの〻なそと
しらて乃家とおもふに我のつけて帰る
とてもかくても　権僧正永縁

いかにして我乃身を志りぬらんもとより本の
涌地の後の乃そらのとへてうき人の家
このかのころものことしとは思はしは

懐寿法師

悟りえは法と思ひかへてあるかな行法秘密の法

常住仏月輪といふ心をよめる

澄成法師

しるとのみいふにはしむ月とみむ菩提もさらに我らかなし

醍醐釈迦会書小花のちるをみてよめる

珠海法師母

地獄の絵につるきの枝に人のつらぬかれ
たるをみてよめる

和泉式部

あさましやつるきの枝のたわむまてこはなにの身のなれるなるらん

やまひして限なく成とひはれてしはしよりと

ふ入くさはらしをはなる高し草葉露つ
にさつり赤顔て顔のはて色かれてさき
のトもしろ　　田口重如

草のうへにかりていきくけり時鳥志て秋山路ゆくや声きき
汗升しをらし人そうけてしるの
たゆるみく宮をくり清涼殿人余りあるみ扇かる
廉風のゆて吹きて風吹門てしれ涼し
の雨にのりて秋さ海りしけるそ扇てり
さるもの恵をしる
　　源師綾朝臣

ものの海濱をうき秋くるゆくとてうへのあをいさ
きりしも

連歌

やまもとの小かやにかゝるなり
人なれぬ物といひしとて
永盛法師
あけまくとやおもひきえにほのかなる
律師慶範
みちのくにちらしもやまのさん
桃薗のと法節とて
松葉法師
桃李のことさへ色さへにほふなれ

公實朝臣
いにしへのむかしのことやしのぶらん
賀茂の庭に詣て物語しける志ける
とて
能盛助
志るしらぬ小寺称乃声さへゆかしき
行重
いにしへの神やまもとくやゆかりなん
宇治にて田の中に老たる男のありけると
備前法覚
見入母
春の田をすきかへすなりかれるか

宇治入道前太政大臣

かつこれくちりぬとりゐきてや

日の入をみて　観暹法師

日のいるはくれなゐにこそにたりけれ

平為成

あかねさすとも思ひけるかな

田の中に馬のたてるをみて　永成法師

田にはむこまはくろにそありける

永源法師

苗代のみつにはかけとみえつれと

かはらやをみて　頼算

かはらやのいたふきにてもみゆるかな

助俊

つちくれしてやつくりそめけん

はしのしたのしもをみて　為助

はしをこそたてるさしのかな

国忠

ゆきけりの月のつゆまてしかそ

しらへ宮ら宗の道かは此歌のうたかた
男の歌とみえてよにはけそけるに
かへし　頼綱朝臣
賀茂のみたらしにてよめる
信綱
[illegible]ありて
あゆとそて　しかへつらむ
[illegible]あはれなる[illegible]にたつらん
近房か妹
[illegible]はいらぬ[illegible]ゆとやいふらむ

和泉式部かゝもにまゐりけるにわらうつに
あしをくはれて紙をまきたりけるを
見て　神主忠頼
ちはやふる神をはあしにまくものか
和泉式部
これをそしものゝやしろとはいふ
源頼光の但馬守にてありけるときたちの
まへにけた川といふ河のかみより舟ののほり
けるをしとみあくるさふらひしてとはせ
けれはたてといふものをかりてまかる
なりといひけるをきゝてくちすさひにいひける

くもすみてひとりたる
源頼光朝臣
ゐてりける寺のすくるありけり
三様を連寺丹関りて
ゆると
あさまれの浦のよきこしめへ
とまひ草のふるおもひをしき
様せ寺の貞と云て
僧つらと
いくかへはしれすむひ草め

やうてまいえのねくすけるおもてと
格のかりまへて
頼要法師
あらてに様とうつき思ふ
読人不知
ゆきまいすとのにかうしとかくに
やりとおゆふりたてるのまと面に
ねまくうまとて
雨の通てきうもとてに成ゆり
かけさかくらしやし

兄のはの梅のにほひさへにくらなりけり

あくまこそ　律師寂蓮

むかしのふれしにほひすらこの山

あしたの風にも梅をかをらん　ゆへすらるは

鶯の声しぬきりてきこゆなとさて

見人しらぬ

しるをとすたりそれのたくひと

みやこのはもとさへいとやまはなくて

こうらとさて　てりけり

わくらをとまやをしをさはのあり

寂運法師

兄ることせくらるてし梅ておる

七十にみちかてけふまかくはらんけり

あらすとしもかはしはやそとある

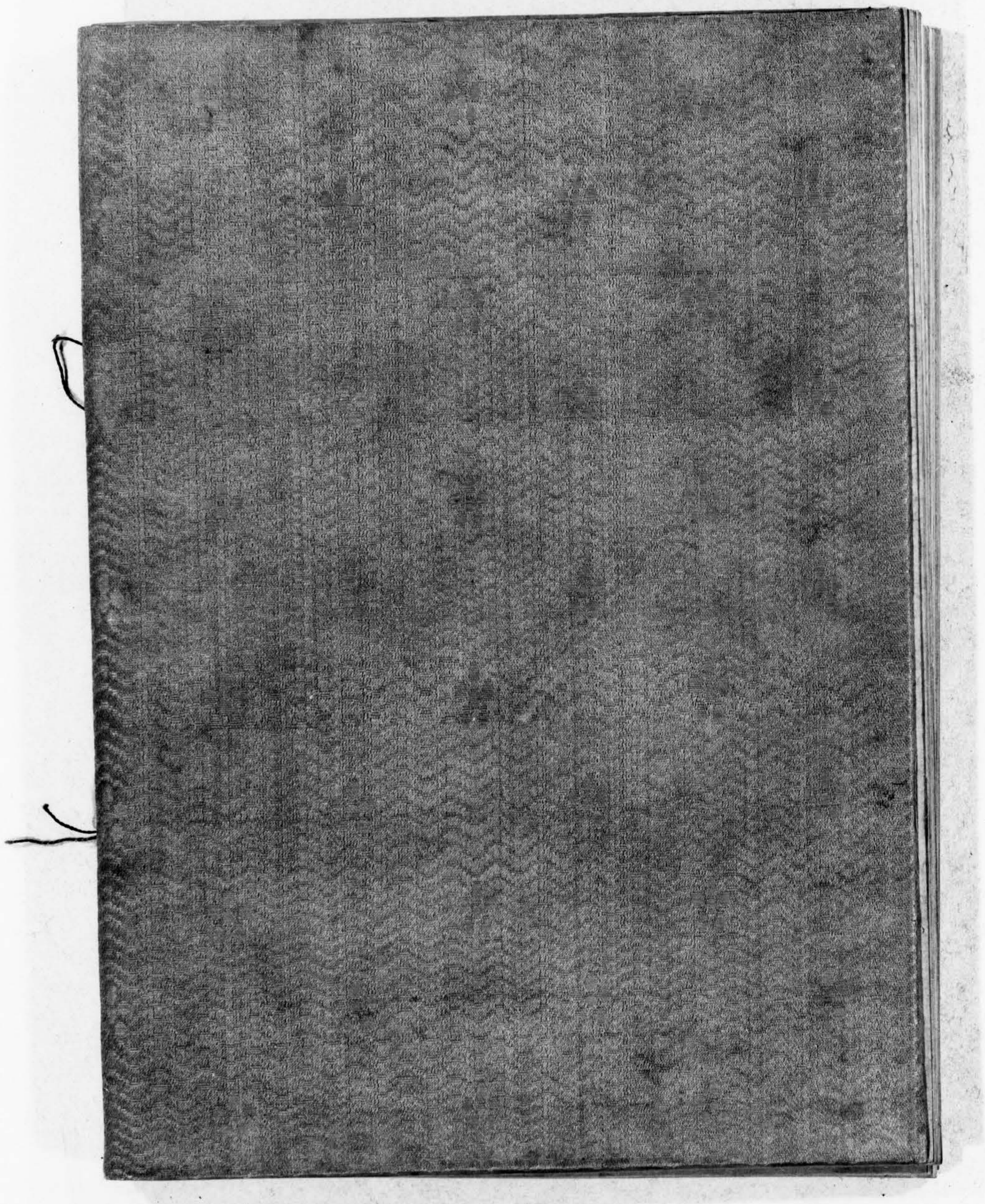
源後頼朝臣

きそらにつらなる古への浜のそれもくせに世

裏書云運歌　読人知

はるくさいちるて梅とそなりける

前太政大臣

風のまにくるそし工り寄

九州大學圖書印